

僕が届けているものは…(2021.04.06~春の新聞週間に『華』を添えて)

僕が届けているものは…僕が届けていることは…

毎日、真夜中に、そいつらの前にバイクを横付けにする。そして、積んである、その『もの』を、僕は、そいつらの口に入れる。ある奴は、口をパクパクさせて「(早く、『そいつ』をくれ!!!)」

と言わんばかりに、僕の手を噛みついて来る。まあ、彼らからすれば、毎日の毎回の決められた食事なのかもしれない。まるで、動物園で見た事がある動物達への餌やりだ。だが、中には殊勝な奴もいる。

「毎日、毎日、ご苦労様です！」

そう言ってから、僕の手から、その『もの』を、口で受け取る殊勝な奴もいる。僕が応える。

「いえいえ…こちらは仕事ですから…どうか、お気になさらずに…」

すると…あいつが…いつものように…

「口に入れられているのは『毒』かも知れないぞ…」

と言い、そこにいつものようにニヒルな笑みを添える。僕もいつものように顔に出てしまう。

「(全く…人と会話しているわけでは無いのに…)」

あいつの、いつもは、留まる事を知らない。すると…

「…俺達に選択肢は無いからな…あんたらの仕事に選択肢が無いように…」

人ではない物が、僕たちに語りかけて来る。より言葉の重さが押し掛かる。これに、あいつが、応えた。

「俺達は…『インフラ』…だものな…」

「…『インフラ』…!？」

その殊勝な奴が思わず聞き返して来た。あいつが、続けた。

「俺達を通じて、人は『もの』を受け取る…」

その殊勝な奴が言った。

「そうか…『インフラ』か…あんた巧い事を言うな…」

「まあ…人が受け取る『もの』が、『毒』かも知れないけれど…ごくたまに、…『もの』が『薬』のときもあるしな…」

人ではない物が笑うとは…これが本当のユーモアか…?僕は目の前で起きている化学変化を見て、僕の視点で『物』『事』を考えて観た。

あいつが、思い出したように言った。

「そうそう…あんた達…たまに口の中に一杯に『もの』を溜めたままにするの…あれ勘弁してな…」

「(あいつは、なんてことを言い出すのだ…でも、まあ…僕個人としても、勘弁して欲しい…処ではあるが…)」

僕が届けているものは…(2021.04.06~春の新聞週間に『華』を添えて)

すると…その殊勝な奴が繰り返すようにして言った。

「…俺達に選択肢は無いからな…」

僕が言った。解っている僕が言うのが筋だろうから。

「僕達は『インフラ』なんだろ。僕達を通じて、人が『人の様』を知る。」

あいつと、その殊勝な奴が同時に僕を見た。

「俺達は…『インフラ』…だものな…」

そう言って、あいつは、そこにいつものニヒルな笑みを再び添える。その殊勝な奴は、独り言のように呟いた。

「…僕達を通じて、人が『人の様』を知る。か…」

あいつが言った。

「起きていることで知るか…『もの』で知るか…書かれた物で知るか…描かれた物で知るか…でも、まあ…」

僕が言った。

「仕事が時間で終わらなくなる…」

まあ、確かにこのこともある。し…それに、今、また『余計な一言』をあいつが言い出しそんな雰囲気もあった。あいつが、ワザと僕に向けて不服そうな顔を作って見せて言う。

「全うな会話(コミュニケーション)をしていたのに…」

殊勝な奴が、僕らのやり取りを見て笑った。そして、僕に言った。

「また、明日！よろしくお願ひいたします！」

僕も言った。

「また、明日！よろしくお願ひいたします！」

毎日、真夜中に、そいつらの前にバイクを横付けにする。そして、積んである、その『もの』を、僕は、そいつらの口に入れる。

それが、僕の仕事だから。

The article was presented by 『TAKUMARO' S FACTORY』 ,
<https://www.factory-takumaro.com/>

© takumaro 2021.04.06~2021.04.08, Printed in Japan.